

『孽海花』の文体：美への追求

麦生，登美江
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9810>

出版情報：中国文学論集. 4, pp.118-130, 1974-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『孽海花』の文体

— 美への追求 —

麦生 登美江

『孽海花』は、魯迅によつて清末の譴責小説の代表作の一つに数えられ、それが現在まで踏襲されてきていることは周知の事実である。私は、前稿「曾樸の文学論と『孽海花』」（『中国文学論集』第三号所収）において、『孽海花』が二〇回本発行の際、歴史小説と銘打たれておるとあり、ある程度は深い清末史の把握があり、それが革命運動に対する好意的描写とあ

いまって、思想的に高く評価されていると述べた。しかし、同時にまた、清末史を書くことと意図し、中国文学が世界文学へ参加できることを願つた曾樸の、改良主義的知識人の枠からはみ出せなかつた限界性をもあわせて指摘し、次のように言っている。

文体が、作家の精神の軌跡であるとするなら、清末史との鋭い対決の姿勢を保持することなく書かれた『孽海花』の文体が、華麗で、時には煩瑣に感じられるほど冗漫に流れた原因もおのずから明らかになつてくる。激しく、自己の全存在をかけて物事の本质上に肉迫しようとする姿勢の欠除したところに、引き締つた、その厳しきゆえにかへつて美しく感じられる文体が生まれるはずがない。『孽海花』の

文体は、やはり華麗な恋の絵巻を展開するのにこそふさわしい文体であつた。（五〇頁）

しかし私は、そこで曾樸の思想的系譜と『孽海花』との関連は明らかにしたもの、実作に基いて所論を検証する紙数がなかつた。従つてこの稿では、前稿で欠落していた文体論的考察を通して、『孽海花』をより深く把握することを目的とする。

—

文体の個々の考察に入る前に、まず曾樸が発刊を呼びかけ、一九〇七年に創刊した月刊文芸誌『小説林』の小説論について触れておこう。この雑誌は、『新小説』、『綉像小説』、『月月小説』停刊後のもつとも主要な文芸雑誌となつた。この雑誌の発刊の動機については、曾樸の長子、虚白の書いた『曾孟樸先生年譜』に拘病時期中三箇年頭研討法国文学的結果先生真切地認識了小説在文学上的特殊地位、因此想要打破当时一般学者轻视小説的心理、糾集同志、創立一家書店、專以發行小説為目的、就命名叫小説林。邑中同志如丁之孫、徐念慈、朱遠生

等皆踊躍投資、……先生自任総理、由徐念慈任編輯、出版小説林月刊、(九頁)

—— 關病期の三年間、フランス文学を深く研究した結果、先生ははつきりと小説の文学上における特別の地位を認識した。そこで當時の一般の学者の小説を軽視する心理を打破しようとして同志を糾合し、一軒の書店を創立し、もっぱら小説の發行を目的として小説林と名づけた。県中の同志、丁之孫、徐念慈、朱遠生らはみんな喜んで投資した。……先生自身総理に任じられ、徐念慈が編集の任に当り、月刊小説林を出版した。

とあり、小説林の出版経過がわかる。二〇世紀初頭、梁啓超が横浜で出した『新小説』にならって、雨後の荀のように文芸誌が流行した。それらの中で主要な文芸誌である『新小説』『綉像小説』『月月小説』などが、梁啓超の『論小説与群治之關係』をまともに受けて功利主義的な文芸論を主張しているのに対し、『小説林』ではそれらと若干異なった小説論を展開している。まず、黄摩西の『小説林發刊詞』には、次のように述べられている。

小説者、文学之傾於美的方面之一種也。……微論小説、文学之有高雅可循者、一屬於審美之情操、尚不暇求真際而擇法語也。(四九九頁)

—— 小説とは、文学の美的方面に傾いたものの一種である。……小説を洞察するに文学のすぐれていてもはやされるのは、それが一に審美の情操に属するからであり、そのうえ真相を求めたり、道を説くことばを選んだりするいとま

はないのである。

さらに徐念慈の「小説林縁起」では、ヘーゲルとキルヒマンの小説が引用されて、黄摩西の理論がさらに深められている。則ちいわゆる小説とは、殆くは理想美学、感情美学に合してその上乘に居る者なる乎？試みに美学の最も發達せし徳意志を以つて之を徵せば、黑爾爾(Hegel, 1770—1831)は美学に於いて絶対觀念論を持する者なり。その言に曰く：「芸術の円満なる者、その第一義は、自然より醇化を為す。」之を簡言すれば、即ち吾人の美的欲望を満足せしめ而して遺憾なからしむるなり。

……之を要すれば円満にして理性の自然に合せしむるに外ならざる也。その徴の一。また曰く：「事物の個性を現す者、いよいよ豊富なれば、理想の發現も亦いよいよ円満、故に美の究竟は理想を具象するに在りて、理想を抽象するに在らず。」……然るにいわゆる美の究竟は小説と固より適合する也。その徴の二。邱希孟氏(Kirchman, 1802—1884)は、感情美学の代表者なり。其れ美の快感を言ひて、謂えらく実体の形象に対して起こると。……種種の感情は、小説に対して之を得ざる莫し。その徴の三。また曰く：「美的概念の要素は、その三は形象性なり。」形象とは、実体の模倣なり。……一は形象性を具うるに非ず、一は形象性を具う。而らば感情は因りて以つて同じからざるなり。その徴の四。また曰く：「美の第四の特性は、理想化なり。」理想化とは、感興の実体よりして、芸術上に於いて無用の分子を除去し、その本性を發揮するの謂なり。(五〇一—

つまり徐念慈は、ヘーゲルの論を引用しつつ、第一に、芸術とは我々の美的欲望を思い残す所のないほど十分に満足させるものであるという。第二に、同じくヘーゲルの論に基いて、美の窮極は理想を具象することにあるから、美は小説と適合するといふ。第三は、キルヒマンを提出して、美的快感は実体の形象に対して起こるものであるから、小説から得ることのできない感情はない、という。第四は、再びヘーゲルにかえって、美的概念の要素は形象性であり、形象とは実体の模倣である。具体的か抽象的かでそれから受ける感情は異なってくるという。第五に同じくヘーゲルの論「美の特性は理想化である」を解説して、理想化とは感興の実体より生ずるもので、芸術における無用の分子をとり除き、その本性を發揮させるという意味である、と述べている。要するに徐念慈は小説を非常に高く評価して、それを理想美学、感情美学に合致してその最高にあるものと考えるのである。そして最後に「定期的に月刊『小説林』を刊行するのは、殆んどかの薫、浸、刺、提の用を伸くせんと欲する」からであると、梁啓超の「論小説と群治之關係」を引用している。

だが、ここで注意すべきことは、徐念慈もまた梁啓超の論を引用していることにあるが、しかし、それは小説を「一国の民を新しくするには、まず一国の小説を新しくしなければならぬ」といふ梁啓超ばりの小説効用論としてとらえているのではない点である。徐念慈は、薫染、浸潤、刺激、同化を小説が本来有している機能ととらえ、このような小説の機能をさらに有

効に發揮させるためにこそ、小説の「美的性格に注目したものである。この点で、小説を開化の手段として高く評価した梁啓超や、その流れをくむ李伯元、德育教化を目的とした吳趸人らとはかなり異なっている。徐念慈や黄摩西らは、小説を何らかの手段としてではなく、純粹芸術の観点から評価したのである。

この徐念慈は曾樸と同郷で親しい友人であり、前述のように曾樸の『小説林』発刊の呼びかけに応じて投資し、その編集に当つた人物である。『小説林』がこうした美的追求を目指したことを考慮に入れば、『孽海花』における美への飽くなき追求の姿勢も理解されよう。時にはそれほどまでの詳細な描写は不必要に感じられ、煩瑣にさえ思えるほどの美しい人物、調度、風景などの描写は、こうした西洋近代思想を皮相に受容したところから導き出されたと考えられる。曾樸が「小説の特別の地位を認識」した背景には、清末に流れ込んだ近代西洋思想の影響があつたのである。

次に曾樸の創作心理について一考してみよう。彼は『孽海花』を執筆した頃、不遇の時期にあつた。総理衙門の受験の際、清朝官吏の腐敗を痛感した曾樸は、それ以後仕官を断念し、実業家を志した。しかし、それもうまくいかず、三年間病床にいた。『小説林社』開設は、その病いえた直後のことである。曾樸は少年時代から文学を好んでいた。「曾孟樸先生年譜」には次のような記載がある。

十三四歳の時、名儒、潘子昭先生の指導を経て、課芸の研討を開始す。然るに先生は驚く文芸を好み、毎に人に背いて竊かに名家の説部及び筆記雑集を読み。当時は目して

性靈を研喪する書籍と爲し、師長叱責すと雖も顧みず、実は則ち先生の文学基礎はこの種の秘かなる行動中に在りて打定せしものなり。(一頁)

少年時代からこのような嗜好性を持つていた彼が、病床にあった時、同文館で習ったフランス語の学力を基礎に、フランス文学に熱中したのは消閑の方法として適當であつた。そして小説が外国に比べて中国では不当に低く評価されていることを知り、「小説林社」開設を呼びかけたのである。「孽海花」は小説林社を経営している頃に書かれた。二〇回本「孽海花」は「歴史小説」と銘打たれてはいるものの、あくまでも正史ではなく小説である。しかも商業ベースに乗せる以上は売れなければならぬ。その時、もつとも世人の興味を引き易いのは、庶民にとつては雲上人であり、士大夫たちにとつては仲間である高官貴人たちの裏話、とくに男女の秘事であろう。曾樸は、書中の金雯青のモデルになっている状態で、ドイツ・ロシア等四か国公使、そのうえ「蒙古史」研究者としても有名な洪文卿とは姻戚関係にあつた。従つて傳影雲のモデルになっている金雯青の愛妾、曹夢蘭とも顔なじみであつた。そのうえ、父、曾之撰の七光りで政界・学界の大物たちとの交際が広く、その内情に通じていた。そうした環境にあつた曾樸が、小説を執筆しようとする際もつとも題材を得やすかつたのは、若い頃から交流の深かつた官界・学界であつた。彼が「孽海花」執筆の際、自分のもつとも親しんだ社会に照明をあてたのはごく自然のなりゆきであつた。しかも清政府の腐敗に愛想をつかして官吏になることをやめ、封建地主からブルジョアジーに転化しようとして、

改良主義的要求を持ち続けた曾樸の筆が、いきおい上流社会の内幕暴露的色彩を帯び、時人の興味を引いて五万部も売り上げたのは当然のなりゆきだつた。

二

「孽海花」でまず印象的なことは、他の「譚實小説」と称されている作品に比べ、美しく華やかな文体で書かれていることである。曾樸は若い頃から駢文が得意であつたらしく、「曾孟樸先生年譜」にはほぼ次のようなエピソードが記録されている。(曾樸は少年時代から常に秘かに小説などを読みふけていた。ある日、曾樸の父、八股文で有名な君表公が曾樸の引き出しから一篇の駢文を見つけ出した。それを読んでさしもの謹厳な老父も、机を叩いて曾樸の駢文の才に感嘆せざるを得なかつた。曾樸は二〇才以前にすでに駢散文集「推十合一室文存」二巻を出した。)(一頁)

こうした曾樸の嗜好性から、「孽海花」に駢文の色彩が濃いわけは首肯できる。魯迅も「孽海花」に関しては「結構工巧、文采斐然」(プロットは巧みで、文章もあやがあつて美しい)と評しているが、その対句の特徴がもつともよく表れているのは人物・風景などの描写である。例えば、曹公坊(曾樸の父、曾之撰がモデルだと考証されている)に献身的につくす陰間の霞芬は、まるで女かと見まごう優しさ、美しさである。

吹彈得破的嫩臉、
鉤人魂魄的明眸、
眉翠含顰、
鬢紅展笑、
一張小嘴、
恰似新破的榴実、(三四頁)

——つつけば破れそうな優しい顔、人の魂を奪うすずやか

な腫、憂いを含んだみどりの眉、ほほえみを浮べた赤いえくぼ、小さな口はまるで綻んだばかりのザク口の実のよう。「眉翠含顰」はもちろん春秋戦国時代、越の国の有名な美人の西施が病気で顔をしかめているのがなんともいえない風情があった、というあの故事を踏まえているのであろう。

次に、傳彩雲の外出時の衣裳について。

就籠上一束蠟雲曼陀誓、繫上一条跡地碎縷裙、頸圍天鵝絨的領巾、肩披紫貂袂的外套、頭上戴了堆花雪羽帽、脚下踏着雕漆烏皮鞋、顛巍巍胸際花毯、光滌滌指頭鑽石、果然是薔薇娘肖像、茶花女化身了。(一一四頁)

——間もなく高いまげを結びあげ、裾が床に広がったスカートを着て、首にはピロッドのスカーフを巻き、肩には紫色の貂で作った外套をはおった。頭には花をあしらった白い羽の帽子をかぶり、足には黒いエナメル靴をはいた。ユラユラ揺れる胸の造花、キラキラ光る指のダイヤ、果して薔薇娘の肖像か、茶花女の化身か？

これだけ立続けにきらびやかな対句をつづり、さらに薔薇娘、茶花女といった西洋から直輸入した新しい語句をも混えている。風景描写に一例をとってみる。

這日正在深秋天氣、節近重陽、草作金色、楓吐火光、秋花亂開、梧葉飄墮、佳人油碧、公子絲鞭、拾翠尋芳、歌來舞往、非常熱鬧。(一一七頁)

——この日はちょうど重陽の節句に近い晩秋の時節で、草は金色に輝き、楓は火を吐くが如くあかく、秋の花々は乱れ咲き、梧桐の葉は風にひるがって散ってゆく。美しい女

性がひきもきらず、貴公子が入り乱れ、美しい景色を訪ね、歌い踊って非常にぎやかであった。

美しく華やかな光景を、対句を重ねることで強調しているのである。

さらに書中の人物曹公坊の文章について批評を加えた条りをみると、四人も具体的な文人の文章の特長を立続けに並べてそれを説明している。

有時機茂峭刻、像水心陳婢、有時宏深博大、如黃岡石台。(一一八頁)

——ある時は機茂峭刻なること水心(項煜のこと)・陳婢(未詳)のごとく、ある時は宏深博大なること黃岡(劉子壯のこと)・石台(李來泰のこと)のごとし。

しかし、これらの叙述に関しては、人物なり風景なりの描写が外面的な説明でしかないことに注意する必要がある。例文からわかるように、それらは舞台上の大道具・小道具・背景にしかすぎない。舞台ならば説明をことさらにしくとも観客の目に写るところを、小説だからやむを得ず文章化したにすぎない。もちろん、このような詳細で美しい描写から当時の高級官僚や文人たちのぜいたくで、現実と遊離した暮しぶりを想像することはできる。しかし、それにしてもこういう描写は写生主義とは言えても、リアリズムと言うことは出来ないだろう。何故ならそこには描写される主体の感情や、描写対象の位置づけがすっぱりと抜け落ちて、たんなる外面描写に終っているからである。リアリズムが本来めざすはずの真実の探求という姿勢が弱く、むしろ自分の文才を誇示するために駢文を取り入れたか

思える箇所すら少くない。

ところがそれが一転して心理描写となると、前述した文体と異なってくる。独白の形をとっているからであらうが、口語なのである。例えば第二四回、役所で彩雲と俳優の孫三兒との情事を小耳にはさんだ雯青が、怒り心頭に発して帰宅し昏倒する。意識の混濁した雯青は、彩雲と関係のあったと思われる男たちの幻影に苦しむ。

忽見雯青手指着牆上掛的一幅德将毛奇的画像道：「哪、哪、哪、你們看一個雄糾糾的外國人、頭頂銅兜、身掛勳章、他多管是來搶我彩雲的呀！」……不想雯青怔了一会、喊道：「啊呀、不好了、薩克森船上的質克、駕着大火輪、又要來給彩雲寄什么信了、太太、這個外國人賊頭鬼腦、我總疑着他。我告你、防着点兒、別叫他上我門！」（二六五—六頁）——ふと見ると、雯青は壁にかかった一幅のドイツの將軍毛奇の肖像を指さして言った：「あ、あ、あ、お前たち頭に銅の兜をかぶり、身には勳章をつけた勇ましい外國人を見ろ、彼は多分、私の彩雲を奪いに來るのだ！」……雯青はしばらくおじけづいていたが意外にも叫んで言った：「あれえ、いけない、サクソニヤ号のチークが、大きな汽船に乗って、また彩雲に何か手紙をよこしにやってくる。妻よこの外國人のこわい顔をしたいかつい男を私はいつも疑っていた。頼む、彼を家の中に入れてさせないように防いでくれ。」

ドイツの將軍の肖像を見ておじけづいたのは、ロシア赴任中、彩雲と熱烈な恋に陥ったヴァルデルゼーとかんちがいしたから

である。次のサクソニヤ号のチーク船長のことは、汽船の模型を見て連想するのである。サクソニヤ号で帰国途中、彩雲とチークの関係が一人の下僕によって暴露されるが、彩雲の巧みな言い逃れと泣きおとしによってうやむやにされてしまう。しかしこの事件はその後も雯青の胸にわだかまっていて、美童の阿福、俳優の孫三兒と続く彩雲の情事の発覚によって一時に爆発するのである。しかもなお裏切られても裏切られても彩雲を離せない哀しみと、正夫人に妾の監視を依頼する男のエゴイズムがよく出ている。

さらに彩雲と、昔、自分の不実ゆえに自殺した妓女を重ね合わせておびえ、正夫人に助けを求めながら死に至る場面は書中の圧巻である。

雯青咽着嗓子道：「你別冤我、那裏是彩雲？這個人明明是贈我盤費進京赶考的那個烟台妓女梁新燕、我不該中了狀元、就背了旧約、送她五百銀子、赶走她的」。説到此、咽住了、倒只管緊攥了張夫人道：「你救我呀！我当时爲了怕人恥笑、想不到她竟会吊死、她是來報仇！」一言未了、眼睛住上一翻、兩脚往下一伸、一口氣接不上、就厥了過去。（二六七頁）

——雯青は声をつまらせて言った：「お前は私をだましてはいけない、どれが彩雲か？この人は明らかに私に旅費を贈って都へ受験しに行かせてくれたあの烟台の妓女の梁新燕だ。私は狀元に合格したらすぐ昔の約束に背いて彼女に錢五百をやって追い返したのだ」ここまで言うともむせび泣いて、かえってひたすらびったりと張夫人に寄りそって言

つた：「助けてくれ、私はあの時ただ人に笑われるのをおそれたのだ。彼女が首を吊るなんて思いもしなかった。彼女は仇をとりに来たのだ、」言い終らないうちに目玉はひっくりかえり、両足はダラリと伸びて一息も続ききらないでもう人事不省におちいつて亡くなってしまった。

恩ある妓女を、自分の名譽のために自殺に追いやったことは、雲青一生の痛恨事であった。平常は彩雲への愛に溺れて意識の外に追いやつていた心のいたみが、死に臨んでいっきよに吹き出すのである。この、雲青が昏倒してから死に至る第二回から二四回までが、心理描写としてはもっとも精彩にあふれていて、面白い箇所である。

またストーリーはまったく一転して、第二八回、日本人、小山清之助が病氣をうつされた腹いせに花子を殺そうとして、ふと我にかえり自問自答する。

我在這裏做什么？殺人嗎？殺人、是個罪；殺人的人、是個凶手。那么、花子到底該殺不該殺呢？她不過受了生理上性的使命、不自覺的成就了這個行為、並不是他的意志。遺伝的病、是她祖父留下的種子、她也是被害人、不是故意下毒害人。至於因快樂、想金錢、這是人類普遍的自私心、若把這個來做花子的罪案、那么全世界人沒一個不該殺、花子不是耶穌、不能獨自強逼她替全人類受慘刑、花子沒有可殺的罪、在我更沒有殺她的理。我為甚么要酒醉呢？衝動呢、明知故犯的去冒險呢？無愛恋而对女性縱慾、便是蹂躪女權；伝染就是報応、人家先向你報了仇、你如何再有向人報仇的權？（三一八頁）

——私はここで何をするのか？殺人か？殺人は罪であり、殺人者は下手人である。では、花子は結局殺すべきだろうか？彼女は生理上で性の使命を受けて、思わずあの行為をしたにすぎない、決して彼女の意志ではないのだ。遺伝性の病は彼女の祖父が残した種であつて彼女もまた被害者である。わざと毒を下して他人を害したのではない。快樂を囚り、金錢を想うのは人類不遍の利己心である。もしそれを以つて花子の犯罪とするなら、世界中の人は一人として殺すべきでない人はいない、花子はキリストではない。彼女一人無理に全人類に代わつて酷刑を受けさせるわけにはいかない、花子には殺すべき罪がなく、私にはさらに彼女を殺す理由がない。私は何故酒に酔つたのか？衝動に駆られたのか？明らかに故意に冒險しようとしたではないか？女性に対して愛なくして慾望をほしのままにするのはすなわち女權を蹂躪することである；伝染はすなわち報いである。彼女がまずお前に仇をとつたのだ、お前にどうして彼女に仇をとる権利があろうか？

こうした人間の本性の探求からすすんで自分の心理を分析し自責の念にかられる——このような心理描写は、他の譴責小説にはあまり見当らない。

さらに注意すべきは、これらの例文がみな独自の形をとつており、従つて口語で書かれていることである。これは前述した衣裳・風景などの説明が駢文調で書かれているのと対象的である。これは「孽海花」の一節毎の字数が、呉趺人の諸作や李伯元の「文明小史」、劉鶯の「老殘遊記」などに比べて長いこと

が多いことと関連している。同じような風景の部分について、『老残遊記』の文体と比較してみよう。

『老残遊記』

進了大門、正面便是鉄公享堂、朝東便是一個荷池。繞着曲折的迴廊、到了荷池東面、就是個門門。門門東邊有三間旧房、有個破匾、上題『古水仙祠』四個字。祠前一副破旧对联、写的是『一盞寒泉薦秋菊、三更画船穿藕花』。過了水仙祠、仍旧上了船、盪到歷下亭的後面。(一一頁)

——表門をくぐると、正面は鉄公の祭堂で、東は蓮池である。曲折した回廊を回って蓮池の東側に出ると、そこに門門があった。門門の東側には三間の古い建物があり、破れた額がかかっている、それには『古水仙祠』という四字が題してある。祠の前にも一副の『一盞の寒泉 秋菊を薦め

三更の画船 藕花を穿つ』と書かれた古い对联がある。

水仙祠を過ぎてまた船に乗り、歷下亭の後へ漕いでいった。これはほとんど修飾語がついていない、実字だけのいわば骨の文である。それに対し『孽海花』は次の如くである。

『孽海花』

言猶未了、已到了一座金碧輝煌的牌樓之下、樓額上写着「五雲深処」四個辟窠大字、進了牌樓、一條五色碎石砌成的長堤、夾堤垂楊漾綠、芙蓉綻紅、還夾雜無數蜀葵海棠。秋色繽紛、兩邊碧渠如鏡、掩映生姿；破芡殘荷、余香猶在；正是波澄風定的時候。忽聽灘頭拍拍的幾聲、一群鸞鸞鸞、鼓翼驚飛。(二二二頁)

——言い終らないうちにもう金色と碧に光り輝く牌樓の下に出た。樓に掛かった額には「五雲深処」という四つの辟窠の大きな字が書かれている。牌樓を過ぎると五色の碎石で築いた長い堤がある。堤をはさんで両側には緑の枝垂れ柳が並び、芙蓉が赤い花をつけ、その上、無数のたちあおいや海棠がまじっていた。秋のけはいがたちこめる中に、両側の碧い池は境の如く人影を写している、時季遅れのみずぶきや蓮も、余香をなお留めている。風もなく波も静かである。と突然、水辺でパチャパチャという音がして、おしどりやさが驚いてどっと飛び立った。

華やかな感じの字を並べた、修飾語の多いいわば肉の文である。文語文、なかんづく古文が、ほとんど実字だけでも成立し得るのに対して、口語文はしだいに多くの助字を加えながら発達してきた。より詳細に、より具体的に風景や人物や事物などを描写するには、簡潔を旨とする文語文、特に古文よりは委曲をつくしうる口語文の方が適している。微妙なニュアンスを加えようとすればするほど、それに伴って助字が増加していくのは必然の勢いである。それが心理描写ともなるとなお古文や駢文では表現しにくいであろう。『孽海花』における心理描写の部分が多、多く独自の形をとって口語文で綴られている訳はここにある。曾樸は、林紘に対し古文でなく口語で翻訳するよう提言したほど、口語文学の必要を感じていた人物である。『孽海花』は、口語文に、曾樸が得意とする駢文をも混えながら、華麗な語句と文体で書かれた、文学革命への過渡的文体を持った小説である。

三

もう一つ、『孽海花』で印象的なことは、美しい人物、それも特に美しく才能のある女性の形象に熱がこもっていることである。登場する男性のほとんどが高官貴人で、地位も名声も経済的実力も有しているながら、雲青はじめ、その多くはどこか間が抜けて少々頼りない感があるのを免れない。それに対して女性像は素晴らしい。たとえば彩雲は、夫を裏切り続ける悪女ではあるが、それにしても美貌で才気煥発、状元で四万国公使という中国最高の知識人である金雲青を手玉にとる様子は、相手が中国を代表する嚇々たる大官であるだけにことさら痛快である。あげくのはてに美童、阿福との濡れ場を雲青に押えられた彩雲は「妾は正夫人と違つて結局おもちやにすぎないのだからどうにでもせよ」と開き直り、かえつて雲青の方があわてふためていたらくである。

雲青不料彩雲說出這套澆辣的話、句句刺心、字字見血、心裏熱一陣冷一陣、面上紅一回白一回、正盤算回答的話
(二二五—六頁)

——雲青は最初、彩雲がこんなひどいことを言い出すとは思ひもよらなかつた。一句一句心を刺し、一字一字血を見る思いで、心は熱くなつたり冷たくなつたり顔は赤くなつたり白くなつたりして、返事のことばを考えこんでいる。さらに第一六・七回に登場するロシア虚無党の女性黨員シャリーは、党と人民のために愛する人を諦めて敵のもとに嫁ぎ、夫を殺して全財産を奪い、それを党にカンパする。そのうえ皇帝に爆弾を振りかざして要求をつきつけ、捕えられて絞首台の露と消えるのである。この女性がまた美貌で冷靜沈着、一点非

の打ち所ない人物である。シャリーがか弱い女性の身であるにもかかわらず、皇帝に爆弾を振りかざして迫る情景は非常に迫力がある。次の文は宮中の秘密探偵員の報告である。

突有一女子、從侍女隊躍出、左手持炸彈、右手搥帝胸、叱曰：「咄、爾速答我、能實行千八百八十一年二月十二日民意党上書要求之大赦國事犯召集國會兩大條件否？不応則炸爾！」帝出不意、不知所云、連呼衛士安在。衛士見彈股慄、莫敢前、相時間、女子拳彈欲擲、帝以兩手死抱之、其時適文部大臣波別士立女子後、呼曰：「陛下莫釈手！」即拔衛士佩刀、猝砍女子臂、臂斷、血溢、女子蹣、帝猶死持彈不敢釈。衛士前擒女子、女子猶蹶起、搥一衛士目、乃被捕。
(一七七頁)

——突然一女子有り、侍女隊より躍り出で、左手に爆弾を持ち、右手は帝の胸を打ち、叱咤して曰く：「これノ爾、速かに我に答えよ、千八百八十一年二月十二日、民衆の意志党が上書して要求せし、国事犯大赦と国会召集の二大条件を能く実行するや否や？ 応せざれば則ち爾を爆破せん！」帝、不意に出でて言う所を知らず、衛士いづくに在りやと連呼するも衛士、爆弾を見て戦慄し、敢えて進まず。相持す間、女子爆弾を挙げて投擲せんと欲す。帝、両手を以つて必死に之を抱う。その時おりしも文部大臣ポベシは女子の後に立ち、叫びて曰く：「陛下、手を放すこと莫れ！」と。即ち衛士の佩刀を抜きてにわかに女子の腕に切りつけたり。腕切られ、血あふれ、女子倒るるも、帝はなお必死に爆弾を持って敢えて放さず。衛士、進みて女子を捕う。女子なお蹶起し、一衛士の目をひつかきしが、ついに捕え

らる。

決死の覚悟で皇帝暗殺を計り、腕を切断されてもなお抵抗を続けるシャーリーの形象は雄々しく感動的である。ところがシャーリーに配する恋人、クロンスキーは、彼女が容貌・性格・思想性、どれ一つとっても卓越しているのに対し、やや気が弱く軽率で見劣りする。同様に、ロシア虚無党のリーダー格としても二人登場するが、やはり男性のポルマよりも、女性のルーツィの方がずっと指導性に富んでいる。そのルーツィは、またシャーリーに勝るとも劣らない美人である。

警眠着魯翠華裝盛服、秀采飛揚、明暎修眉、豐頤高準、比到夏雅麗、另有一種華貴端凝氣象。(一七五頁)

——ちよつと見ると、ルーツィは美しく着飾って、高い知性、明るい瞳にくつきりした眉、豊かな頤に高く通った鼻、シャーリーに比べて、また一種の華かで高貴な雰囲気を持っている。

もう一例だけあげるなら、祝宝廷の後妻に納まった江山船の娘、珠兒である。彼女もまた多芸多才な美女であった。

珠兒本是風月班頭、吹彈歌唱、色色精工。宝廷着实的享些艷福、倒也樂而忘返了。(六八頁)

——珠兒はもともとなかなかの風流人で歌舞音曲に関して色々芸達者であった。宝廷は艷福に浸りきって、楽しんで万事を忘れてしまった。

しかし、その珠兒は北京の水が合わなくて早世する。愛妻を失った宝廷はすっかり自暴自棄になり、満州貴族という恵まれた境遇にもかかわらず毎日酒を飲み回っていた。ある晩、酔い

つぶれて他家の軒先で眠ってしまった、風邪をひいて亡くなる、という悲惨な最期をとげるのである。

このように、登場する女性のほとんどが美しく、彩雲を除いては肯定的に描かれている。ところが、男性で好意的に叙述されているのは曹公坊と、彼に献身的につくす陰間の琴芬くらいなものである。この二人以外の男性は、たいていどこかに諷刺・嘲笑・からかいのニュアンスが含まれている。曹公坊だけが好意的に描かれているのは、曹公坊のモデルが他ならぬ曾樸の父、曾之撰であったため、自然に美化することになったのである。

では何故、曾樸がこんなにも女性を美化し、そしてまた男性を諷刺しているのか？その原因について考えてみたい。「曾孟樸先生年譜」には以下のような記載がある。〈曾樸が最晩年になつてから書いた「魯男子・恋」という小説は、曾樸の十代の頃の初恋を描いたものである。それは従妹との恋で家父長制の壁に妨まれて成就しなかった。その後、円珊という女性と結婚したが、彼女は女兒出産後まもなく病歿し、日ならずしてその女兒も夭折した。傷心の曾樸は科擧さえ受ける気になれず、父の命によつて試験場には入つたものの、わざと答案用紙を汚して退場した。さらに、再婚した沈香生と曾樸の母との間柄がうまくいかず、曾樸は妻と母の間で立つて非常に苦しみ、この大家庭をとび出して別の道を見つきたいと願つたのが、後年、政治活動や社会事業にたざさわる最初の動機であった。〉

このような曾樸の略歴から、曾樸にとつて原体験と言ひ得るものが二つあつたと考えられる。一つは、初恋の破局や、沈香

生と母との嫁姑の関係に象徴される封建的大家族、家父長制の圧迫であり、この旧制度のために、曾樸の対女性関係は必ずしも恵まれたとは言えない状況が続いた。そうした不幸な状況の中で、曾樸は理想の女性を求めて女性を美化していったのではないだろうか。初恋の思い出を、何十年も大切に胸に抱き続けた曾樸、最初の妻の死に臨んで、『雲疊夢院本』四巻という哀悼詩集を編んだ曾樸、後妻と母の確執に悩んだ曾樸——そうした多感な青年が、知らず知らず胸中に美しい理想の女性を描いている、それらが『孽海花』に反映したのだとは考えられないだろうか。曾樸の年譜を読んで浮かび上る曾樸像は、多感な熱血漢である。フランス文学に熱中し、辛亥革命後は改良主義政治家として郷里の江蘇省で活躍した。袁世凱の帝制復活の策謀に対しては私財を投げうって討袁軍を組織した。袁世凱死後の軍閥混戦の中では、必死に江蘇省の独立を守り抜こうとした。そうした情熱的な男性の胸に、女性への憧れが秘められていたのだった。

もう一つの原体験は、官界・学界の内情を知ったことである。出世欲・権力争い・女・金・嫉妬……そこにはあらゆる欲望、野心が渦巻き、様々な人間模様が織りなされていた。曾樸は、在京官吏（内閣中書）で交際も広がっただけに、そうした事実を嫌というほど目撃し愛想をつかしたのである。『孽海花』に登場する政界・学界の大立物ほとんどに、どこかに諷刺・嘲笑・非難のニュアンスが含まれているのは、無理もない。魯迅は、そうした点をとらえて、『譴責小説』の代表作の一つに数えたのであろう。しかし、『孽海花』には、『譴責』とだけは言い

切れないものがある。次節でそれを検討してみよう。

四

前述したように『孽海花』の文体は、他の『譴責小説』と称されている作品に比べて、かなり際立った特徴を持っている。つまり、他の作品が文体が簡潔で語彙も地味な感じがあるのに比べて、『孽海花』は文体も語彙も華やかなことである。魯迅によって同じく『譴責小説』と分類されたにもかかわらず、何故このような差異が生じたのか？ここではそれを、清末史を書こうと意図した曾樸の意識と文体との関連を中心に考察してみたい。まず曾樸は、清末史を次のように把握している。

この書の主要な意義は、ただ私がこの三〇年間を見て来たことにある。それは我が中国の旧より新へいたる大転換期であり、一方では文化の推移、一方では政治の変動という驚くべき、喜ぶべき現象が、みんなこの一時期に飛ぶように進化した。私はこれらの現象を、その側影あるいは遠景と、関連ある細々したことをひとまとめにして私のペンのカメラにおさめ、自然にそれらを一幕一幕展開させ、印象上ちようど大事の全景すべてを目撃したようにさせたいと考えた。例えば、この書は政治を描いて清室の滅亡に至ると、徳宗と西太后の失和に重点が置かれている。というのは、皇室の婚姻史、魯陽伯、余敏の買官、東西宮の権力争いなどはみんな後の成成の政変、義和団の乱の根原になつてからである。雅聚園、含英社、談瀛会、臥雲園、強学会、蘇報社を描いているのは、みんな当時の文化過程の中における足跡であつたからである。

この文から、曾樸が正面から清末史を取り上げるのではなく、側面から描写しようと思図していたことがわかる。その側面も、曾樸の目に映じたのは民衆のサイドではなく、皇室、高級官僚、学界・文壇の重鎮といった、支配階級ないしはその取り巻きに属する側である。そうした上流社会の中で様々に展開される人間模様を、曾樸はその社会に親しんだ、その社会の一員としての目で描写したのである。この点で、官僚社会からはじき出された鬱憤を『老残遊記』に託した劉鶚や、没落地主で官吏になることも出来ず、仕方なく小説家として身を立てた呉趼人らと、曾樸とは小説執筆の意図に差異が生じたのは当然である。曾樸は、光緒帝の師であった翁同和宅によく出入りし、前述の如く洪文卿とは姻戚関係にあり、その他の高官、学者文人たちとも交際していた。いわば、国政の中枢にかかわる部分と接触があったのである。しかしながら、曾樸自身は腐敗墮落しきった官界に出仕することを望まず、実業家になろうと志した。『孽海花』に描かれている上流社会に、曾樸自身、批判の目を向け、帝国主義列強のようしやない侵略に亡国の危機感を募らせたのである。それは第一回最後の文章に現れている。

愛自由者が語りながら、東亞病夫が書いていったのがつまり三〇年の旧事であり、書かれていたことはみな血痕なのだ。四億の同胞よ、願わくば早く目覚めてくれ。(四頁)

そして実業を興し、国会を開設し、教育を普及するといった改良主義的施策によって中国の危機を救おうとせいつぱい努力したのである。だが、その改革はあくまでも上からの改革であって、封建主義と帝国主義の二重の圧迫に苦しんでいる人民

大衆の立場に立ったものではなかった。『孽海花』において民衆がほとんど登場していないのはそのためであろう。『孽海花』に描かれているのは主として民衆の手の届かないぜいたくな世界である。立派な邸宅、高価な調度品、美しい景色、きらびやかな衣裳……、そこで交される会話は中国の命運にかかわる政治談、考証学、酒席での酒令、そしてラブ・ロマンスの噂……、このような上流社会の有様を描出する際に、特にその華麗さを表現する際に、華やかな文体と語彙が求められたのであった。と同時にまた、前述したように口語で翻訳するよう林紘に提言したほど進歩的であった曾樸が、『孽海花』ではややもすれば駢文調の文体に傾きがちになる原因は、言文一致の提言が、封建性を打破して近代をつかみとつていく意識の変革の問題として明確に把握されていない点にあるように思う。林紘への提言も「白話を用いるのは、普遍的理解を希望するからだ」としか言っていない。その認識の不徹底さが、『孽海花』執筆の姿勢にも反映して、歴史が支配階級と人民大衆の緊張関係の上に成立していることを理解できず、歴史の表面に顕現している支配層だけに目を向けて事足りりとしたのではなからうか？それは、八股文の大家を父に持ち、地主の家庭に育った曾樸が自らの出自と教養から脱皮できなかつたことを示している。そして、その上流社会人としての曾樸の意識及び『小説林』の「小説は美の最上のものである」という主張と『孽海花』の文体とは分ちがちがたく結びついて、清末「譴責小説」群の中ではユニークで華麗な文体を創造したのであった。

註

- (1) 魯迅著『中国小説史略』（香港今代図書公司刊 一九六五年）
- (2) 曾樸著『擊浪花』（世界書局刊、楊家駱主編增訂中国學術名著第一輯 中国通俗小説名著第一集 第三十五冊、中華民國五一年）
附録一「曾孟樸先生年譜」 兒子虛白未定稿
- (3) 郭紹虞 羅根沢主編『中国近代文論選』下（人民文学出版社 一九六二年・北京）
- (4) 同前
- (5) 同前 五〇三頁
- (6) 梁啓超著『飲冰室文集』第二冊・飲冰室文集之十「論小説与群治之關係」（台湾中華書局印行 中華民國四十九年）
- (7) (1)に同じ
- (8) 劉勰著『老殘遊記』
- (9) (2)に同じ 附録二「曾孟樸先生復胡適之先生的信」には、次のようにある。△「是用自話、固然希望普遍的了解、而且可以保存原著人的作風、叫人認識外国文学の真面目、真精神；（二二頁）
- (10) (2)に同じ 「修改後要説的幾句話」四頁